

1896年刊『実地応用朝鮮語独学書』の韓国語について

Characteristics of Korean in "Zitchi Oyo Chosengo Dokugakusyo" published in 1896

陳南澤*

Namtaek JIN

岡山大学全学教育・学生支援機構教育研究紀要

第1号 2016年12月

岡山大学高等教育開発推進室

岡山大学教育開発センター

岡山大学基幹教育センター

岡山大学学生総合支援センター

岡山大学グローバル・パートナーズ

1896年刊『実地応用朝鮮語独学書』の韓国語について

陳南澤*

Characteristics of Korean in "Zitchi Oyo Chosengo Dokugakusyo"
published in 1896

Namtaek JIN

要旨

本稿では開化期の韓国語学習書である『実地応用朝鮮語独学書』(1896)について、韓国語の文とその仮名音注を分析し、本書に現れる19世紀末の韓国語の特徴(音注・語彙・助詞・語尾など)を概観した。また『実地応用朝鮮語独学書』を基に約20年後の1915年に著者の弓場重栄により京城で刊行された『ポケット朝鮮語独学』(1915)と本書との相違点をまとめ、韓国語の変遷などを考察した。

本書には開化期のソウル方言の口語的な特徴がよく反映されており、言語学的な価値を持っているといえる。また開化期の商業関連用語が多く現れることと、「第四編 会話」には同時期の他の韓国語学習書と比べて独自の文が多いことも特徴である。今後、明治期の他の韓国語学習書や韓国人のための日本語学習書を総合的に考察することで、現代韓国語の形成過程をより明らかにできると期待される。

キーワード：韓国語 開化期 実地応用朝鮮語独学書 ポケット朝鮮語独学

1. はじめに

本稿では1896年に日本人のための韓国語学習書として東京で発行された『実地応用朝鮮語独学書』¹⁾(明治29年、弓場重栄・内藤健編)に現れる韓国語の単語と文およびその仮名音注を分析し、本書に現れる19世紀末の開化期の韓国語の特徴を概観する。また『実地応用朝鮮語独学書』を基に約20年後の1915年に著者の弓場重栄により京城で刊行された『ポケット朝鮮語独学』²⁾(大正4年、著作者弓場重栄)と本書を比較し、韓国語の変遷などを考察する。

明治期の1890年代には、日本人のための韓国語学習書が多く刊行されており、これらの文献には開化期の韓国語の口語的な特徴を表すものが多い。本書に反映されている韓国語

* 岡山大学 全学教育・学生支援機構 基幹教育センター

1) 『実地応用朝鮮語独学書』は、1896年4月に東京の哲学書院から出版された韓国語学習書であるが、初版は未見である。本稿では1900年(明治33年)に刊行された4版(日本国立国会図書館の所蔵本)を分析対象にしたが、内容的に同様であると思われるので、1896年刊と呼ぶことにする。また、著者の弓場重栄による同時期のほかの著書としては1897年刊行の日本語学習書の『簡易捷徑日語独学』(明治30年、東京、発行兼編纂者弓場重栄、国立国会図書館所蔵本)がある。

2) 『ポケット朝鮮語独学』は大正4年(1915年)京城の日韓書房で出版された韓国語学習書で、東京経済大学所蔵本を分析対象にした。

の性格について『実地応用朝鮮語独学書』と『ポケット朝鮮語独学』の「凡例」³⁾には、本書が京城(現在のソウル)の語⁴⁾をもとに編纂したと記されており、「第四編 会話」には同時期の他の韓国語学習書⁵⁾と比べて独自の文が多くみられる。また本書に同時代の商業関連用語が多く現れることも特徴である。

2. 『実地応用朝鮮語独学書』について

本書は1896年4月に弓場重栄⁶⁾により出版された韓国語学習書で、明治四十五年には二十八版を重ねたという。本書には、巻頭に「序」(櫻浦生)、「緒言」(編者識)、「凡例」、「目次」があり、目次の次に「第一編」から「第四編」、巻末に附録として「朝鮮八道地名并京城ヨリ各地距離」が付いている。

参考までに『ポケット朝鮮語独学』には、巻頭の「序」と「緒言」、巻末の「附録」がなくなり、「凡例」から始まる。また「第四編 語法」が追加され、本書の第一編にあった「第十五 (テ)(ニ)(ヲ)(ハ)」が「第四編 語法」に移っている。「第三編 単語」はほぼ同様であり、本書の「第四編 会話」は『ポケット朝鮮語独学』では「第五編 会話」となっている。

<表1> 『実地応用朝鮮語独学書』と『ポケット朝鮮語独学』の構成および他の学習書との比較

実地応用朝鮮語独学書	ポケット朝鮮語独学	その他
序(櫻浦生) 緒言(編者識) 凡例 目次	序(櫻浦生) 緒言(編者識) 凡例 目次	
第一編 朝鮮諺文(1-18頁) 第一 諺文ノ解 第二 子母(音)ノ區別 第三 発音ノ組成并ニ解例 第四 発音ノ區別并ニ解 第五 朝鮮諺文 第六 余音軽音ノ解 第七 激音ノ解 第八 重音ノ解 第九 重激音ノ解 第十 諺文綴法解例 第十一 綴字発音法 第十二 濁音ノ解 第十三 変遷活用ノ解 第十四 子音変遷ノ解 第十五 (テ)(ニ)(ヲ)(ハ)	第一編 朝鮮諺文 左同 第十三 音便ノ解 第十五 (テ)(ニ)(ヲ)(ハ)	
第二編 基数及数称(19-33頁) 第十六 俗称基数 第十七 音称基数 第十八 通貨ノ算数称 第十九 尺度ノ数称 第二十 斗量ノ数称 第二十一 権衡ノ数称 第二十二 单独称量 第二十三 年称 第二十四 月称 第二十五 日称 第二十六 時称 第二十七 里程称	第二編 基数及数称 左同	

3) 朝鮮語ニ於テモ我國ノ方言ノ如ク一一道一一道ニヨツテ種々ノ訛言アリ[中略]本書ハ彼ノ京城ノ語ヲ憑拠トシテ編纂シタリ

4) 本書に現れる主題格助詞「은/는」と目的格助詞「을/를」「하다」「오나라」などは20世紀初めのソウル方言の語形である。

5) 例えば『日韓會話』(明治27年8月刊行)と『朝鮮語学独案内』(明治27年12月刊行)には共通する文または内容が類似する文が多く見られる。また『旅行必用日韓清對話自在』(明治27年7月刊行)の文の大部分も『日韓會話』の本文と同じものであり、『日本語独案内』(明治28年刊行)も『日韓會話』とほとんどの例文が共通している。

6) 櫻井義之(1974a:118-119)は、「著者弓場重栄氏は明治二十年渡韓、第一銀行釜山支店に在勤その間釜山語学所速成科に入り朝鮮語を学んだ。その後第一銀行各地の支店、出張所等に勤務し、朝鮮銀行の設立と同時に同銀行に転じ本支店に勤務したが、のち新設の京城銀行の支配人となった。内藤健氏は弓場氏と同時に韓語科に学んだという以外その伝を詳にしない。…本書は相当行なわれたごとく、明治四十五年には二十八版を重ねている」と記述している。

また弓場重栄は1873年4月1日に東京下谷区御徒町三の三で生まれた人物である。(川端(1913)『朝鮮在住内地人実業家人名辞典:第一編』p.227、黄雲(2015:100)から再引用)

第三編 単語(34-47頁) 第二十八 宇宙 第二十九 時期 第三十 身体 第三十一 人 族 第三十二 国土及都邑 第三十三 文芸及遊技 第三十四 官位 第三十五 職業 第三十六 商業 第三十七 旅行 第三十八 家宅 第三十九 家具及日用品 第四十 衣服 第四十一 飲食 第四十二 草木及果実 第四十三 家禽獸 第四十四 貿易品	第三編 単語 左同	『日韓通話』(1893)の部門配列 第五章 天然 第六章 月日 第七章 時期 第八章 身軀 第九章 人 族 第十章 国土及都邑 第十一章 文芸及遊技 第十二章 官位 第十三章 職業 第十四章 商業 第十五章 旅行 第十六章 家宅 第十七章 家具及日用品 第十八章 衣服 第十九章 飲食 第二十章 草木及果実 第二十一章 家禽獸
	第四編 語法 第一章 代名詞 第二章 接續詞 第三章 働詞 第四章 語尾 第五章 否定詞 第六章 套話	
第四編 会話(49-159頁) 第一章 初対面用談話 第二章 久々ニテ面会用談話 第三章 来客応接用談話 第四章 食食用談話 第五章 旅行用談話 第六章 旅宿用談話 第七章 商業取引用談話 第八章 雑談	第五編 会話 左同	『日韓会話』(1894)第7編の部門構成 第一章 始メテ逢ヒシ人トノ談話 第二章 久々ニテ逢フタル人トノ談話 第三章 来客ニ対スル談話 第四章 食事ニ関スル談話 第五章 旅行ニ関スル談話 第六章 同上馬夫トノ談話 第七章 途上ニテ起ルヘキ談話 第八章 旅宿ニテ起ルヘキ談話 第九章 商店ニテ起ルヘキ談話 第十章 食料品売買ノ談話
附録 朝鮮八道地名并京城ヨリ各地距離	朝鮮八道地名并京城ヨリ各地距離	

本書の「緒言」⁷⁾には、先輩の著書によりそのなかに編者の實地習得したものを交えて編纂したと記されてある。李康民(2008)は、本書の「第三編 単語」が『日韓通話』(1893)の構成を参考にして作られたことと、本書の「第四編 会話」(『ポケット朝鮮語独学』の「第五編 会話」)の構成が『日韓会話』(1894)の「第7編」の本文構成を参考にして作られたものであることも指摘している。上記の<表1>は、『実地応用朝鮮語独学書』と『ポケット朝鮮語独学』の構成と、『日韓通話』(1893)および『日韓会話』(1894)の「第7編」を比較したものである。本書は本文の構成において『日韓会話』(1894)等を参考しているが、「第四編 会話」の文には他の学習書と共通する文⁸⁾より独自の文が多い。

7) 本書ハ主トシテ先輩ノ著書ニ據リ又其中ニ余等ノ實地習得シタルモノ等ヲ交ヘテ編シタルモノナリ

8) 次は本書と他の韓国語学習書において共通または類似する文の一部である。以下、『実地応用朝鮮語独学書』の文は「実」、『ポケット朝鮮語独学』の文は「ポ」、『日韓会話』の文は「日會」、『朝鮮語学独案内』の文は「朝独」、『日本語独案内』の文は「日独」、『日韓英三國對話』の文は「三」と表示し、数字は頁番号を示す。「?」は便宜上筆者がつけたものである。

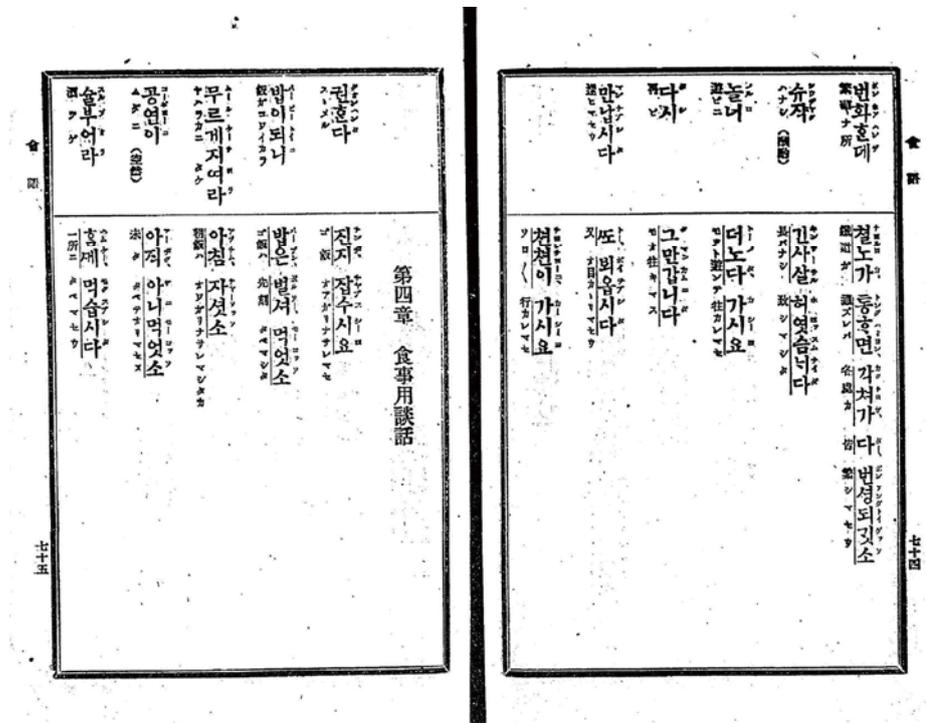
- 저 길이 갖가오나 미오 험시오 (日會-224)(朝独-145)
- 저길이 갖갑소 (実-101)(ポ-168)

- 그 주막 일음이 무어시요? (日會-225)
- 그주막일음이 무어시요? (実-103)(ポ-169)

- 저 길히고 이 길은 어네거시 갖갑소 (日會-223)(朝独-146)
- 저길히고 이길히고 어느길이 갖갑소? (実-101)(ポ-167)

- 우리는 미양 이 길 갑네다 (日會-221)
- 우리는 미양 이 길 가갯소 (朝独-178)
- 우리는 미양 그길을 갑니다 (実-99)(ポ-165)

本書の「第四編 会話」は<図-1>のように二段で構成され、上段には「増補」として韓国語の文や単語、下段には韓国語の文がハングルで書かれ、それぞれ左に日本語訳、右にハングルに対する仮名表記が施されている。



<図-1> 実地応用朝鮮語独学書

編者による本書の「緒言」には、本書の作成について國分哲の影響が伺える説明⁹⁾がある。國分哲は1892年創立された「公立釜山商業学校」¹⁰⁾と後の「釜山公立夜學校」の朝鮮語教員として努めており、また「釜山公立夜學校」の韓国人教員の沈能益は『実地応用朝鮮語独学書』の校正¹¹⁾を担当した。

『実地応用朝鮮語独学書』の先行研究には、櫻井義之(1974a)、李康民(2008)、成玟珂(2009)、齊藤明美(2013)、齊藤明美(2015)、黄雲(2015)等があり、主に日本語あるいは日本語教育、または書誌的な面に関して分析しているが、韓国語に関する分析は少ないといえる。

・반찬은 가져왔스니 김치만 노아라 (実-111) (ポ-177)
 ・반찬은 다 가져왔스니 김치만 노하라 (日會-231)

9) 余等韓地ニ居住スル既ニ八年其間朝鮮語速成科ニ入り稍其語學ヲ修ム當時速成科ノ教員タリシ對馬ノ人國分哲氏・・・今日ノ急務一日モ忽セニスルニ能ワザレバ之ガ編輯ヲ君等ニ勸ムル所以ナルト茲ニ於テカ如等大ニ奮起スル所アリ淺學不肖ヲ願ミズ敢テ此書ヲ編輯シタル所以ナリ・・・

10) 1892年創立された「公立釜山商業学校」(校長は濱田弘道、教員に中谷民三、國分哲など)は商業科と英語および朝鮮語教育を進めたが、1894年に「釜山公立夜學校」になり、後に幹語科だけが残るようになった。幹語科の朝鮮語教員には、川上立一郎、國分哲、大石明、朴教學、沈能益、邊時中が努めていた。

11) 「在釜山公立韓語夜學校囑託教師 沈能益 校正」と1頁に記されている。

3. 「実地応用朝鮮語独学書」の韓国語について

本章では『実地応用朝鮮語独学書』に現れる韓国語の特徴(音注・語彙・助詞・語尾など)を概観する。また約20年後に刊行される『ポケット朝鮮語独学』と本書との相違点を見ることにする。

本書の「第四編 会話」には同時期の他の学習書と比べて独自の文が多くみられ、また本書には開化時の商業関連用語¹²⁾が多く現れることも特徴である。

◎ 商業関連用語

(実-41) 간식 見本 슈가 仕込	견패 失敗 시가(시직) 相場	낙본 損失
(実-140) 횃척 切り売り	(実-129) 이획 引割き	(実-128) 표 슈표 證書
(実-134) 장괴 仕切書	(実-131) 입구 輸入	(実-132) 출구 輸出
(実-134) 상준 引合	(実-123) 절중 品切	(実-125) 직전 現金
(実-125) 맞돈 現錢	(実-100) 부비 費用	(実-120) 본가 原價
(実-121) 지천 下落		

次は開化期の韓国語の姿を示す語形である。

◎ 前舌母音化と関わる語形

(実-36) 춤 (実-46) 증싱 (実-142) 부즈런이

◎ 高母音化と関わる語形

(実-35) 나중 (実-36) 얼굴 (実-42) 집웅 (実-37) 동모
(実-58) 모도 (実-43) 기둥 (実-58) 아조 (実-47) 소곰
(実-36) 손뜯

◎ 口蓋音化と関わる語形

(実-36) 세¹³⁾ (実-45) 침치¹⁴⁾

3.1. 本書と「ポケット朝鮮語独学」の相違点

本書はソウル方言を基に編纂されたものであり、『ポケット朝鮮語独学』は本書を基に約20年後に同一著者(弓場重栄)により改編されたものである。両書の違いは韓国語の変遷や時代の変化を反映していると考えられる。

まず、ハングル表記の面では、ほとんどの「・」が「ト」に変わっていることが目立つ。また、「철>털」のように古い表記に戻っている項目もみられる。これらのハングル表記の変化は1915年のハングル表記法の影響であろう。

◎ ・の表記の変化

(実-36) 마을	(ポ-39) 가을	(実-34) 들	(ポ-37) 달
(実-34) 밭뜬	(ポ-37) 바람	(実-35) 요스이	(ポ-38) 요사이
(実-35) 키큰	(ポ-38) 하로	(実-36) 막음	(ポ-40) 마음
(実-37) 으희	(ポ-41) 아희	(実-77) 상흔	(포-144) 상한거시

12) 編者の弓場重栄が銀行員であったことも関わると考えられる。

13) 同時の多くの韓国語学習書で「세」の語形が見られる。

(日會-88) 세 (日独-45) 세 (朝独-64) 세 (三-67) 세

14) 文献によっては「침치」「김치」の両方が現れる。

(実-45) 침치 / (実-81) 김치 (日會-117) 침치 / (日會-121) 김치
(三-116) 김치 (日独-51) 침치

◎ ハングル表記の変化

(実-47) 쇼	(ポ-51) 소	(实-45) 쇠고기	(ポ-49) 쇠고기
(实-78) 식우	(ポ-144) 새우	(实-55) 디승전	(ポ-125) 대승전
(实-74) 만남시다	(ポ-141) 맛납시다	(实-153) 정만	(ポ-219) 작만
(实-84) 흥쎬	(ポ-151) 흥쎬	(实-47) 염철	(ポ-52) 염털
(实-47) 철	(ポ-52) 털	(实-62) 지체하면	(ポ-132) 지체하면

次に、時代の変化などを反映して追加または削除、変更された項目をみることにする。

◎ 『ポケット朝鮮語独学』で追加された項目

(ポ-57) 기차 汽車	(ポ-44) 고원 雇員	(ポ-44) 과장 課長
(ポ-44) 국장 局長	(ポ-44) 사무관 事務官	(ポ-44) 서기 書記
(ポ-44) 서기관 書記官	(ポ-44) 속 屬	(ポ-44) 장관 長官
(ポ-44) 총독 總督		

◎ 『ポケット朝鮮語独学』で削除された項目

(实-40) 원 地方官	(实-38) 외아문 外衙門	(实-39) 거류지(조계) 居留地(租界)
(实-40) 어스 御使	(实-40) 슈스 水使	(实-40) 세즈 世子
(实-40) 현감 縣監	(实-40) 현령 縣令	(实-40) 전어관 傳語官
(实-40) 부스 府使	(实-40) 첨스 僉使	(实-40) 감스 監司
(实-69) 그일노 일본말교사 청허러 가깃소		
(实-69) 이번 일본어학교를 설립 허옵니다		
(实-70) 일본말 공부하는척이업소?		
(实-72) 서울서 부산까지 철노논는단말이잇소		
(实-72) 서울서 인천까지 먼저 된다허오		

◎ 『ポケット朝鮮語独学』で変更された項目

(实-157) 옷썸이요	(ポ-223) 제일이요	(实-59) 빅별	(ポ-129) 작별
(实-39) 서당(학당)	(ポ-43) 학교(학당)	(实-64) 슈십	(ポ-134) 넘너
(实-116) 미떡장스	(ポ-182) 곡식장스	(实-143) 슈틀	(ポ-209) 주판을
(实-47) 말은멜어	(ポ-51) 말은멜어치	(实-43) 광	(ポ-48) 광이
(实-46) 괴	(ポ-51) 고양이	(实-38) 어린놈	(포-42) 어리석은놈
(实-61) 예	(포-131) 네 ¹⁵⁾	(实-68) 통스	(포-137) 통번
(实-61) 맛츨물건	(포-131) 맛츨물건이	(实-70) 다락에	(포-138) 이층에
(实-55) 일청싸음은	(포-125) 일독싸음은	(实-56) 청국서	(포-127) 덕국서
(实-38) 청국	(포-42) 지나	(实-66) 잡섯소?	(포-136) 잡수섯소?
(实-120) 혈게하시요	(포-186) 싸게하시요		
(实-120) 좀 가감허여라	(포-186) 좀 감허여라		
(实-59) 천만의외 말씀이요	(포-129) 천만의 말씀이요		
(实-121) 나진다 나지거든	(포-187) 낫다 낫거든		
(实-145) 놈의 보기실소	(포-211) 보기실소		
(实-68) 속히 차자주시오	(포-138) 속히 무러보아주시오		
(实-74) 번성되깃소	(포-140) 번성허여지오		
(实-110) 밥을 어셔너라	(포-176) 밥을 가져오너라		
(实-154) 년세가 얼마나 되계시오?	(포-220) 년세가 얼마나 되여계시오?		

他にも本書の誤字を修正した項目も多くみられる。

◎ 『ポケット朝鮮語独学』で誤字を修正した項目

(实-31) 다엿세	>	(포-34) 대엿세	(实-127) 그레이지	>	(포-193) 그러치
(实-111) 숭뉴	>	(포-177) 숭뉴	(实-53) 갈비계	>	(포-124) 갈비가
(实-86) 법갑슨	>	(포-153) 밥갑슨	(实-122) 물간	>	(포-188) 물건
(实-144) 안일	>	(포-210) 만일	(实-145) 우니마오	>	(포-211) 우지마오

15) 「예ハ方言ナリ」と記されている。

3.2. 音注について

本書のハングルには片仮名で音注が施されている。この音注は韓国語学習書の伝統的な音注表記に従っているが、当時の韓国語の発音を示しているところも多い。「第五 朝鮮諺文(조선언문)」には次の表が載っているが、本文の音注では異なる場合も散見される。

<表2> 『実地応用朝鮮語独学書』の「第五 朝鮮諺文」

	開合法音種別	第一級開口音		第二級咽喉音		第三級舌音		第四級唇音		第五級牙音		
		ㅏ	ㅑ	ㅓ	ㅕ	ㅗ	ㅛ	ㅜ	ㅠ	ㅡ	ㅣ	·
平音	ㄱ	가 카-	갸 キヤ-	거 コラ	겨 キョ-	교 コ	교 キョ	구 ク-	규 キユ-	크	기	마
	ㄴ	나 ナ-	냐 ニヤ-	너 ノラ	녀 ニョ-	노 ノ	뇨 ニョ	누 ヌ-	뉴 ニユ-	느	니	나
	ㄷ	다 タ-	댜 チャ-	더 トラ	더 チョ-	도 ト	됴 チョ	두 ツ-	듀 チユ-	드	디	타
	ㄹ	라 ラ-	랴 リヤ-	러 ロラ	려 リョ-	로 ロ	료 リョ	루 ル-	류 リユ-	르	리	라
	ㄴ	마 マ-	먀 ミヤ-	머 モラ	머 ミョ-	모 モ	묘 ミョ	무 ム-	뮤 ミユ-	므	미	마
	ㅂ	바 バ-	뵤 ビヤ-	버 ボラ	벼 ビョ-	보 ボ	뵤 ビョ	부 ブ-	뷰 ビユ-	브	비	바
	ㅅ	사 サ-	샤 シヤ-	서 ソラ	셔 ショ-	소 ソ	쇼 ショ	수 ス-	슈 シユ-	스	시	사
	ㅇ	아 ア-	야 ヤ-	어 オラ	여 イョ-	오 オ	요 ヨ	우 ウ-	유 ユ-	으	이	아
	ㅈ	차 チャ-	챤 チャ-	저 チラ	져 チョ-	초 チラ	됴 チョ	추 チウ	쥬 チユ-	츠	치	차
輕音	ㅎ	하 ハ-	햐 ヒヤ-	허 ホラ	혀 ヒョ-	호 ホ	됴 ヒョ	후 フ-	휴 ヒユ-	흐	히	하
激音	ㅋ	카 カツ	갸 キヤ-	커 コツ	겨 キョ-	교 コツ	교 키ョ	쿠 クツ	규 キユウ	크	키	마
	ㅌ	타 タツ	댜 チャ-	터 토ツ	더 チョ-	도 토ツ	됴 チョ	투 ツ-	듀 チユウ	드	디	타
	ㅍ	파 パツ	뵤 ビヤ-	퍼 ボツ	벼 ビョ-	포 ボツ	뵤 ビョ	푸 ブ-	뷰 ビユウ	프	피	바
	ㅊ	차 チャツ	챤 チャ-	처 チョツ	져 チョ-	초 チラツ	됴 チョ	추 チユツ	쥬 チユウ	츠	치	차
重音	과	귀	낀 쇼(취)	되 뒤	괘 뒤	뵈 뒤						
	화	휘	화 휘	와 위	화 휘	화 휘						
重激音	과	귀	괘 뒤	괘 뒤	화 휘							

全般的に本書の仮名音注は文字転写と音声転写が交えているといえる。次の例は本書の仮名音注がハングル表記を対応する仮名にそのまま写したのではなく、実際の発音を反映しようとしたものであることを示している。「連音化」と「ㅎの脱落」は広く反映されており、「鼻音化」も多く反映されている。ただ、「二重母音の音注」は単語や語尾によって異なる傾向が見られる。

- ◎ 連音化¹⁶⁾
 - (実-15) 간으 카ヌ (実-15) 막이 バーキー (実-87) 중간에 チュンガーネ
 - (実-124) 필연 피어리온
- ◎ ㅎの音注
 - (実-77) 만히 마ーニー (実-81) 과히 クワーイ (実-86) 넉넉히 ノクノーキ
- ◎ 鼻音化
 - (実-72) 잇는 인ヌン (実-32) 십니 シブニ (実-64) 갑니다 カムニタ

16) 「第十三 變遷活用ノ解」では「으 이」の前の音節末子音が連音化されると説明されているが、本文では他の条件でも連音化が反映されている。

- ◎ 二重母音の音注

(実-38) 동너 トングナイ	(実-35) 너일 ナイイル	(実-51) 아시깃소? アシケツソ
(実-24) 셋치 세ーツチ	(実-24) 넷치 ドイツチ	(実-25) 세홉 세ーホプ
(実-29) 세히 세ー하이	(実-31) 일에 이ー레이	(実-34) 우레 우ー로이
(実-29) 흥개 한카이	(実-78) 고래 코라이	(実-122) 간대로 칸다이로
- ◎ 레-르

(実-90) 천리 초롤리어	(実-114) 안녕이 ¹⁷⁾ 알리요우기
(実-97) 그길노 킨키로	

3.3 助詞

本書の「第十五 (テ)(ニ)(ヲ)(ハ)」では、助詞の用法が次のようにまとめられている。

- ◎ 「第十五 (テ)(ニ)(ヲ)(ハ)」における助詞の例

은 는 슌 른 이 가 시 치 을 를 슬 흘 에 세 데 기 서 로 으 로 이 로 의 와 과 도
말은 말이 말을 말과 기는 기가 기를 기와 갖슨 솟치 붓시 옷슬 못세 벗데 밧기

しかし本文では「츄 치 출」の用例は現れず、主題格助詞「은/는/슬」、主格助詞「이/가/시」、目的格助詞「을/를/슬」が使われている。参考までに連帯形語尾「는」は使われず、「는」になっている。また『日本語独案内』(1895)に現れる「내를 내에 내와 내도」のような方言の影響と思われる語形は現れない。

- ◎ 主題格助詞

(実-50)(ポ-121) 나는	(実-99)(ボ-165) 우리는
(実-50)(ポ-121) 공은	(実-62)(ボ-132) 물건은
(実-109)(ボ-175) 이거슨	(実-86)(ボ-153) 갑슨
- ◎ 主格助詞

(実-55)(ポ-125) 제가	(実-83)(ボ-150) 내가
(実-153)(ボ-219) 누가	(実-141)(ボ-207) 나라가 ¹⁸⁾
(実-85)(ポ-152) 서울이	(実-90)(ボ-157) 화륜선이
(実-79)(ポ-146) 맛시	(実-84)(ボ-151) 여러시
(実-94)(ボ-162) 흥필 삭시	(実-114)(ボ-180) 밥갑시
(実-109)(ボ-175) 뉘흔거시	
- ◎ 目的格助詞

(実-127)(ポ-193) 나를	(実-136)(ボ-202) 장사를
(実-66)(ポ-136) 공을	(実-121)(ボ-187) 물건을
(実-152)(ボ-218) 옷슬	(実-125)(ボ-191) 갑슬
(実-53)(ボ-124) 무엇슬	(実-150)(ボ-216) 이거슬
- ◎ その他の助詞

(実-53)(ポ-124) 서울에	(実-69)(ボ-138) 오늘밤에
(実-73)(ポ-140) 서울서	(実-85)(ボ-152) 어디
(実-93)(ボ-161) 이고을에서	(実-124)(ボ-190) 요다음편으로
(実-89)(ボ-156) 수로로	(実-91)(ボ-158) 못흐로

17) 韓国語の単語の発音の変化を示す例である。

(実-114) 안녕이 알리요우기 (ボ-180) 안녕이 안니요우기
(日會-199) 안녕 알리요그

18) 「나라」の場合、文献によって「나라히」と「나라가」が使われている。また、『國民小學讀本』(1895)では「나라히 (12a) 나라가(63a)」の両方が現れ、『新訂尋常小學』(1896)では「나라이(3-18a)」の例がみられる。

(日會-59) 나라히 (日独-35) 나라이 (朝独-167) 나라가

(実-97)(ポ-165) 그길노	(实-50)(ポ-121) 무슨일노
(实-61)(ポ-131) 시계와	(实-119)(ポ-185) 공과
(实-62)(ポ-132) 간후의	(实-152)(ポ-218) 목욕간의
(实-51)(ポ-122) 나도	(实-113)(ポ-179) 너도

次の<表3>は開化期の文献における主題格・主格・目的格助詞の使用をまとめたものであるが、当時の韓国の教科書¹⁹⁾と比べて韓国語学習書の方が現代韓国語の用法に近いことが分かる。

<表3> 開化期文献における助詞の使用

	은	는	은	는	은	는	은	는	은	는	은	는	은	는	은	는	은	는	은	는
1892 日韓英三國對話	0	0	0	0	X	X	X	X	0	0	0	0	0	0	0	0	X	X	X	X
1894 日韓會話	0	0	0	0	X	0	X	X	0	0	0	0	0	0	0	X	X	X	X	X
1894 朝鮮語学独案内	0	0	0	0	X	X	X	X	0	0	0	0	0	0	0	X	X	X	X	X
1895 日本語独案内	0	0	0	X	X	X	X	X	0	0	0	X	0	0	0	X	X	X	X	X
1896 実地応用朝鮮語独学書	0	0	0	X	X	X	X	X	0	0	0	X	0	0	0	X	X	X	X	X
1915 ポケット朝鮮語独学	0	0	0	X	X	X	X	X	0	0	0	X	0	0	0	X	X	X	X	X
1895 小學讀本	0	X	0	X	X	0	X	X	0	0	0	X	0	0	0	X	X	0	X	X
1895 國民小學讀本	0	X	0	X	X	0	0	X	0	0	0	0	0	0	0	X	X	0	0	X
1896 新訂尋常小學	0	X	0	X	X	0	0	X	0	0	0	0	0	0	0	X	X	0	0	X
1897 國文正理	0	X	0	X	X	0	X	X	0	0	0	X	0	0	0	X	X	X	X	X

3.4. 終結語尾

本節では、本書における終結語尾を概観し、『ポケット朝鮮語独学』において語尾の使用に変更がある文も提示することにする。『ポケット朝鮮語独学』では「<니다>」²⁰⁾と「<오>」の変更が一般にみられ、「<읍시다>」の例も散見される。

3.4.1. 平叙形語尾

本書では平叙形語尾として「<읍시다>、<네다>/<니다>、<소>、<오>/<요>、<다>」が使われ、「<습나이다>、<사외다>」などは現れない。『ポケット朝鮮語独学』において「<니다>」と「<오>」の変化が目立つ。次は平叙形語尾の例である。

◎ <읍시다>

- (实-94)(ポ-162) 열닷냥이 읍시다
(实-123)(ポ-189) 상품이 읍시다

◎ <니다>/(<네다>/<니다>)

- (实-142) 나읍니다
(实-157) 나읍네다
(实-49) 초읍 뵈읍니다
(实-57) 오락간만에 뵈읍니다
(实-88) 허읍니다

니다

- (ポ-208) 나읍니다
(ポ-223) 나읍니다
(ポ-120) 초읍 뵈니다
(ポ-127) 오락간만에 뵈읍니다
(ポ-155) 허읍니다

19) 鄭吉男(1999:131)によれば、例えば主題格助詞の場合、開化期の一部の韓国語聖書に「<는>」が少し現れるが、当時の韓国の教科書や天主教関連文献では「<는>」が一般的に使われた。

20) 参考までに明治16年本『交隣須知』と『日韓會話』(1894)には「<네다>」、『日韓通話』(1893)には「<니다>」、『日韓英三國對話』(1892)と『朝鮮語学独案内』(1894)には「<니다>」、『新訂尋常小學』(1896)と『校訂交隣須知』(1904)には「<니다>」が主に現れる。

◎ 리다

- (実-63)(ボ-133) 그썩는 전송허오리다
- (実-68)(ボ-137) 즉금은! 업스나 아라보오리다
- (実-69)(ボ-138) 오늘밤에 무리보고 알게허오리다
- (実-144)(ボ-210) 너일은 기필고 보너오리다

◎ 외다

- (実-62) 감사허외다 (ボ-132) 감사합니다
- (実-104) 락우 놓흐외다 (ボ-170) 락우 놓흐오
- (実-104)(ボ-170) 발이 압프외다
- (実-83)(ボ-150) 먹어보니 맛시 과연 돗스외다
- (実-121)(ボ-187) 나진거 아니외다
- (実-146)(ボ-212) 황송허외다

◎ 오, 요

- (実-51) 피츠 일반이요 (ボ-122) 피츠 일반이오
- (実-84) 서울 갈터이요 (ボ-151) 서울 갈터이오
- (実-115) 말씀이요 (ボ-181) 말씀이오
- (実-67) 다름아니요 (ボ-137) 다름아니오
- (実-118)(ボ-184) 비록 돈이잇셔도 미덤이! 데일이요
- (実-131)(ボ-197) 여러가지요
- (実-50)(ボ-121) 나는 동경사오
- (実-63)(ボ-133) 너일앗침에 화륄선이 온다허오
- (実-67)(ボ-137) 나는 동경 가려허오
- (実-79)(ボ-146) 씨도 업고 맛도 다오
- (実-157)(ボ-223) 비가 압푸오

◎ 소/소이다

- (実-51) 나는 즈셰이 모르깃소 (ボ-122) 나는 즈셰이 모르오
- (実-126) 콩 시가가 락우 혈소 (ボ-192) 콩 시가가 락우 혈허오
- (実-71)(ボ-139) 이다락은 경치가 락우돗소
- (実-113)(ボ-179) 저기 잇소
- (実-50)(ボ-121) 귀국풍속을 보러왔소
- (実-51)(ボ-122) 나도 일본말을 모르깃소
- (実-75)(ボ-142) 아직 아니먹엇소
- (実-81)(ボ-148) 과히 먹으면 몸에 히롭소
- (実-98)(ボ-165) 대단이 느것소

- (実-72)(ボ-140) 이신문지에 별말이 만소이다
- (実-77)(ボ-144) 고맙소이다
- (実-120)(ボ-186) 과허지 안소이다

◎ 다/되다

- (実-95)(ボ-162) 너무 빗스다
- (実-107)(ボ-173) 그만 이방이라도 돗다
- (実-104)(ボ-171) 비가 올썩허니 그만두깃다
- (実-106)(ボ-172) 그러면 혈수업다
- (実-112)(ボ-178) 평양셔 왔다

- (実-58)(ボ-128) 볼것업습되다
- (実-60)(ボ-130) 갓습되다

3.4.2. 疑問形語尾

本書では次のような多様な疑問形語尾が使われている。また、疑問形語尾「-가:-고」の対

立は1例だけ見られる。『ポケット朝鮮語独学』において「요 > 오」の変化が目立つ。

◎ 닳가/릿가

- (実-58) 이디를 가섯습더닛가? (ポ-128) 어디를 가섯습릿가?
 (実-60)(ポ-130) 자미나 잇섯습닛가?
 (実-145)(ポ-211) 무슨 수심이 잇습닛가?
 (実-66)(ポ-136) 그릿습닛가?
 (実-95)(ポ-162) 얼마 주시깃습닛가?
 (実-136)(ポ-202) 장사가 경영대로 냉기면! 죽히 죠흐릿가?

◎ 오, 요,

- (実-116) 공은 무슨 장스를 허시오? (ポ-182) 공은 무슨 장스를 허시오?
 (実-50) 공은 일본어디 사시오? (ポ-121) 공은 일본어디 사시오?
 (実-52) 공은 누구시오? (ポ-123) 공은 누구시오?
 (実-52) 어딤 계시오? (ポ-123) 어딤 계시오?
 (実-101) 이길은 어디로 가는길이오? (ポ-167) 이길은 어디로 가는길이오?
 (実-65)(ポ-135) 드러가도 관계치 아니허오?
 (実-85)(ポ-152) 예서 서울이 몇이나 되오?
 (実-60)(ポ-130) 또 어딤 가실터이오?

◎ 소

- (実-51) 공은 조선말을 아시깃소? (ポ-122) 공은 조선말을 아시오?
 (実-50)(ポ-121) 무슨일노 나오섯소?
 (実-50)(ポ-121) 어제 왓소?
 (実-53)(ポ-124) 언제 오깃소?
 (実-60)(ポ-130) 엇지 그럴니가 잇소?
 (実-101)(ポ-167) 저길히고 이길히고 어느길이 갓갑소?

◎ 냐, 나

- (実-52) 사냐? (ポ-123) 사느냐?
 (実-113)(ポ-179) 뒤안은 어딤잇나?
 (実-107)(ポ-173) 불씩엇나?
 (実-114)(ポ-180) 이물 먹깃나?
 (実-86)(ポ-153) 얼마냐?
 (実-103)(ポ-169) 방도 씨끗허냐?
 (実-106)(ポ-173) 아니쓰릿더냐?
 (実-108)(ポ-174) 업느냐?
 (実-156)(ポ-222) 무얼허느냐?

◎ 가, 고

- (実-136)(ポ-201) 선가는 흥점에 얼마나 허는고?
 (実-120)(ポ-186) 니를 갑절이나 먹으라흐니 되는가?

3.4.3. 命令形語尾

本書では極尊稱の「-쇼셔」は現れず、「-시오、-오、-라」が使われている。

◎ 시요

- (実-51)(ポ-122) 공부허시오
 (実-52)(ポ-123) 문점언문을 비옵시오
 (実-52)(ポ-123) 줍가룻쳐 주시오
 (実-54)(ポ-125) 흥번 가보시오
 (実-64)(ポ-134) 집안 걱정마시오
 (実-71)(ポ-139) 그만두시오

◎ 오

- (実-94)(ポ-161) 짐바리 세필 어더 주오
 (実-145)(포-211) 실업시 웃지마오
 (実-147)(포-213) 헛말마오

◎ 라

- (実-76)(포-143) 저녁밥을 손님게 드러라
 (実-94)(포-161) 삭군 돌이 질머 오나라
 (実-97)(포-164) 천천이 모라라
 (実-97)(포-165) 그길노 가거라
 (実-98)(포-165) 헛길 흐지마라
 (実-99)(포-166) 말죽 먹여라

3.4.4 勸誘形語尾

本書では勸誘形語尾として「읍시다/읍시다/되시다 ㅈ」が現れている。『ポケット朝鮮語独学』において「읍시다 > ㅈ시다」の変化が目立つ。

- | | |
|--------------------------------|---------------------|
| (実-49) 인사 허읍시다 | (포-120) 인사 험시다 |
| (実-51) 그리허읍시다 | (포-122) 그리험시다 |
| (実-51) 서로 공부 허읍시다 | (포-122) 서로 공부 험시다 |
| (実-72) 줌 보읍시다 | (포-140) 봅시다 |
| (実-74)(포-141) 쫓 보읍시다 | (实-67)(포-137) 그리험시다 |
| (実-70)(포-138) 다락에 갑시다 | (实-75)(포-142) 먹습시다 |
| (実-96)(포-164) 써납시다 | |
| (実-81)(포-148) 연헌 고기를 기름의 지저 먹자 | |
| (実-98)(포-165) 이길은 머니 저리 가자 | |
| (実-99)(포-165) 밥먹자 | |

5. 終わりに

本稿では開化期の韓国語学習書である『実地応用朝鮮語独学書』(1896)について、韓国語の文とその仮名音注を分析し、本書に現れる19世紀末の韓国語の特徴(音注・語彙・助詞・語尾など)を概観した。また『実地応用朝鮮語独学書』を基に約20年後の1915年に著者の弓場重栄により京城で刊行された『ポケット朝鮮語独学』((1915))と本書との相違点をまとめ、韓国語の変遷などを考察した。

本書には開化期のソウル方言の口語的な特徴がよく反映されており、言語学的な価値を持っているといえる。また開化期の商業関連用語が多く現れることと、「第四編 会話」には同時期の他の韓国語学習書と比べて独自の文が多いことも特徴である。今後、明治期の他の韓国語学習書や韓国人のための日本語学習書を総合的に考察することで、現代韓国語の形成過程をより明らかにできると期待される。

<参考文献>

- 小倉進平(1940)『増訂朝鮮語学史』刀江書院
桜井義之(1974a)「日本人の朝鮮語学研究(一)-明治期における業績の開題-」『韓』3-8
------(1974b)「日本人の朝鮮語学研究(三)-大正期における業績の開題-」『韓』3-12
齊藤明美(2013)「『ポケット朝鮮語独学』と『実地応用朝鮮語独学書』について」『日本語文学』第59輯,
------(2015)「弓場重栄の三つの学習書にみられる日本語について-『簡易捷徑日語独学』
の日本語を中心に-」『日本語学研究』第44輯
陳南澤(2010)「『日韓英三國對話』におけるハングル表記と仮名音註について」『大学教育研究紀要』第6号
------(2012)「『日韓通話捷徑』における仮名音註について」『大学教育研究紀要』第8号
------(2013)「『朝鮮語学独案内』における仮名音註について」『大学教育研究紀要』第9号
------(2014)「1894年刊『日韓會話』の韓国語について」『大学教育研究紀要』第10号
------(2015)「1895年刊『日本語独案内』について」『大学教育研究紀要』第11号
成玗姮(2008)『近代日本語資料としての朝鮮語會話書—明治期朝鮮語會話書の特徴とその日本語—』東京大学博士論文
山田寛人(1998)「朝鮮語学習書・辞書から見た日本人と朝鮮語 -1880年~1945年-」『朝鮮学報』第169輯
黄雲(2015)『韓国開化期における日本語教育に関する研究』麗澤大学博士論文
유필재(2001)『서울지역어의 음운론적 연구』ソウル大学校博士学位論文
李康民(2008)「1896년 年刊『実地応用 朝鮮語独学書』에 대하여」『日本語文学』第39輯
韓国日本語文学会
鄭吉男(1999)『개화기 교과서의 우리말 연구』박이정

<分析資料>

- 弓場重栄(1896)『実地応用朝鮮語独学書』, 国立国会図書館所蔵(日本)
弓場重栄(1915)『ポケット朝鮮語独学』, 東京経済大学所蔵本

<参考資料>

- 松岡馨(1894)『朝鮮語学独案内』, 国立国会図書館所蔵(日本)
赤峯瀬一郎(1894)『日韓英三國對話』, 国立国会図書館所蔵(日本)
參謀本部(1894)『日韓會話』, 国立国会図書館所蔵(日本)
稻益謙吉(1895)『日本語独案内』, 国立国会図書館所蔵(日本)
弓場重栄(1896)『簡易捷徑日語独学』, 国立国会図書館所蔵(日本)

<開化期の教科書>

- 學部編輯局(1895)『小學讀本』21世紀世宗計劃コパース(韓国)
學部編輯局(1895)『國民小學讀本』21世紀世宗計劃コパース(韓国)
學部編輯局(1896)『新訂尋常小學』21世紀世宗計劃コパース(韓国)
李鳳雲(1897)『國文正理』21世紀世宗計劃コパース(韓国)

陳南澤